別記様式第21号（第32条第２項関係）

最終試験の結果の要旨

報告番号	保研　第　25　号		氏　名	丸田　道雄
審査委員	主　査	窪田　正大		
	副　査	簗瀬　誠	副　査	赤崎　安昭
	副　査	榊間　春利	副　査	宮田　昌明

主査及び副査の５名は、令和２年11月18日、学位請求者の丸田道雄に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。

具体的には、以下に示すような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

質問１）今回の論文では、どのような点が先行研究と比べてアピールできる点と考えているか。
（回答）地域高齢者の大規模集団において重要な活動を調査している点と活動の種類に関わらず満足度が抑うつに関連している点と考える。

質問２）都市部と地方で活動が異なると思うがその点については、どのように考えているか。
（回答）活動の特徴については、都市部と地方では異なるので、本研究の結果とは異なると考えられる。また、どのような活動が抑うつに特に影響するかまでは検討できていないため、その点についても都市部と地方での違いが結果に影響する可能性がある。

質問３）服薬数が抑うつ群で多かったが、これは抑うつに関連するような薬なのか。また、副作用も影響すると考えられるが、その点はどのように考えているのか。
（回答）向精神薬を除き、全ての薬を含んでいる。副作用の影響はあると思うが、共変量として投入しているため解決されていると考える。

質問４）重要な活動は固定しているものか、状況によって変化するものなのか。
（回答）本研究の定義上は変わってくるものと考えている。

質問５）重要な活動が変わってくる原因にはどのようなものがあるか。
（回答）様々な要因があると考えられるが、最近ではCOVID－19などの社会的な状が考えられ、また、入院などの転帰や結婚などの家庭環境などの変化によっても変わると考えられる。

質問６）施設に入所している方などに対して、実際にどのようなことをすればよいと考えられるか。
（回答）施設入所中や入院中の方が重要な活動への参加は制限され、そのような状況の方がニーズは高いと考えられる。本研究における対象者においては、まず自分自身の重要な活動を認識しることが一つと考える。また、地域の直接的な介入は現実的に難しいと考えられるため、対象者が現在取り組んでいる地域の活動に対する価値づけを高めていくことができると考える。

質問７）抑うつ群の方がゴルフをする割合が多いが、この乖離はどのように解釈するのか。
（回答）スポーツに関しては抑うつ群が７名しかおらず、n数の影響を受けていると考えられる。全体としてもアクティブな活動の方が多いかと予想されたが、あまり変わらない結果であった。

質問８）この結果を今後の作業療法にどのように活かしていくのか。
（回答）対象者が現在取り組んでいる活動の重要性、価値づけを高めていくことによって抑うつなどのアウトカムが変化するかを比較したい。入院の方に対しては、日常の業務で行っていることであり、それを地域の方々に工夫して導入していきたい。

質問９）地域の高齢者の重要な活動を支援するとは具体的にどのようなことか。
（回答）重要な活動を聴取し、その原因に直接介入できることが望ましいと思うが、現実的には難しい。そのため、現在取り組まれている活動に、目的を持ってもらうなどして動機づけを高めていくことができると考える。

質問１０）この研究の抑うつという表現がどの程度の抑うつと理解すればよいのか。
（回答）あくまで評価スケール上での抑うつとしかいえない。

質問１１）画像を用いての器質的な検討を予定しているか。
（回答）画像を用いての比較の予定はない。当初より除外基準で、器質的に抑うつに影響を与える可能性のある対象は除外していた。

質問１２）身体機能低下についてはどのようなものを含んでいるのか。自覚症状はあるのか。
（回答）歩行速度と握力の低下のみで判断している。自覚症状については、この研究では含んでいないため確認したい。

質問１３）趣味とはどのようなものを指しているのか。
（回答）読書や手芸といった受動的なものからもっとアクティブな活動まで多くを含んでいる。

質問１４）抑うつというよりも不安を表しているようにも感じられるが、不安に関する尺度はとっていないのか。
（回答）不安に関する尺度についは、評価を行っていない。今後、どのような側面に影響があるかを調査していきたい。

質問１５）抑うつ群は遂行度が低くなっているが、ロジスティック回帰分析では全体は満足度のみが影響し、女性では遂行度も影響している。この点については、どのように解釈するのか。
（回答）遂行度は満足度の要因でもある。全体でみると、活動ができることよりもその活動に満足できるかどうかが重要であると考えられる。活動を詳細に検討できていないが、女性では男性に比べて家庭生活や社会交流など他者との関わりの多い活動を多く選んでいることが反映された可能性がある。また、女性のn数が多いことも影響している可能性が考えられる。

以上の結果から、５名の審査委員は本人が大学院博士課程修了者と同等の学力と見識を充分に具備しているものと判断し、博士（保健学）の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。